

感染症予防における情報共有システムの開発

～ICT の日常業務での情報共有を中心として～

Development of Information Sharing System for Infection Control Team (IS-ICT ver.2)

For Sharing Information on ICT Rounds

提出日

2014年1月29日

指導教授

齋藤 正武 准教授

中央大学商学部

学科

経営学科

学籍番号

10C1110015D

氏名

高橋 大輝

感染症予防における情報共有システムの開発
～ICTの日常業務での情報共有を中心として～
Development of Information Sharing System for Infection Control Team
For Sharing Information on ICT Rounds
(IS-ICT ver.2)

高橋 大輝
齋藤正武ゼミ

病院や診療所など医療施設が抱える課題の一つに院内感染がある。院内感染とは医療施設で入院患者もしくは医療従事者が、人や医療器具を通して細菌やウイルスなどの微生物に感染することをいう。院内感染が集団感染となると病院全体に広がり多くの被害が出る。院内感染は病院経営だけでなく患者の命まで危険に及ぶ。近年の事例で、数名から数十名の患者が院内感染の被害にあっている。

病院ではこうした院内感染の対策を行うために感染制御部が存在する。この部署では感染対策の啓蒙、病原体の蔓延予防や検出、感染症発生時の対応などを行っている。そして重要な業務の一つに担当の医療従事者への感染症の情報連絡・共有がある。病院内の集団感染は時間が経過すればするほど被害が広がるため感染症が発生した場合医師や看護師にすぐ連絡を行わなければならない。しかし医療従事者間での情報共有は、週に1回ある程度で、迅速に連絡ができる体制になっていない。この問題を解決するためには情報技術(IT)を用いて情報共有のシステム化を行うことが望ましい。

本研究では酒井(2013)既存研究に引き続き、獨協医科大学の感染制御センターをモデルに情報共有のためのシステム開発を行った。システム開発を行うに当たり医療現場で導入が進んでいるiPadを利用することを前提に開発を行った。

既存研究では最終的にプロトタイプシステムを感染制御センターの職員の方から評価していただき、一定の有効性は得られたが、多数の指摘もいただいた。問題点として挙げられたものが「システムの構造」、「情報の整備」、「使いやすさ」である。そして、病院訪問時に行われた企業プレゼン時の病院職員の方々の反応とヒアリングで得られた情報を考慮し、本研究におけるシステム開発の方向性を、感染症の「対処・治療」ではなく「予防」に重きを置くことにした。IT企業が開発したシステムにはない、現場である獨協医科大学病院感染制御センターの業務に即した、使い勝手の良さを追求すべきであると考えた。

獨協医科大学病院の感染制御センターで実装したシステムの有効性を確かめた結果、いくつかの指摘はあったものの、システムを業務に利用したいという意見もいただいた。今後の課題は、現システムのセキュリティ面を強化して、更に業務理解を進め、最終的には業務に根付くようなシステムへと改良することである。